

平成30年6月26日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26370838

研究課題名（和文）前近代社会における人の識別について コンバウン王国を事例に

研究課題名（英文）The Categorization of Inhabitants of the Pre-modern Central Ayeyawady Basin under the Konbaung Dynasty

研究代表者

伊東 利勝（ITO, Toshikatsu）

愛知大学・文学部・教授

研究者番号：60148228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：前近代社会における「人種」名は、単に住民の出身地や信仰形態の違いをあらわすものにすぎず、社会的な「排除」や「包摂」の手段として機能していなかった。ところが近代国家（国民国家）による集権化は、ひとつの言語や規範つまり「文化」によって推進されるので、そうしたなかで形成される政治勢力は、自らの「文化」に強いこだわりを示し、これを運動の原動力とせざるをえず、ここに「人種」が民族に転化し、ナショナリズム運動やエスニック闘争が形成され、拡大していくことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In pre-modern society the label of 'race' did not work as a device for 'exclusion' and 'subsumption', but simply denoted differences of birthplace, language, religion or etc. of inhabitants. However, as the modern nation state developed a centralized system of administration through the promotion of certain languages, customs and ideology, each community was compelled to focus on 'culture' to unify around their mutual interests, the sense of 'race' became a sense of nation, and nationality or ethnicity came into being.

研究分野：歴史学

キーワード：民族 「人種」 国民国家 コンバウン王国 101の人種 カラビョー ビルマ・ムスリム エスニシテ
イ

1. 研究開始当初の背景

民族は、現代社会を認識し、構想する際の基本的視角であるが、これが国民国家の出現とともに出来上がったパラダイムであることは、多くの論者によって指摘されている。しかし前近代にも「民族」名を示す言葉は存在し、これがその意味内容において近代以後とどのような違いがあったかについては明らかにされていない。

そのため民族さらには人種が、一つの政治集団として超歴史的に使用され、ナショナル・ヒストリーの成立に大きく貢献している。民族(人種)名を主語とする叙述は、現行の高校『世界史』教科書にも認められ、これが各国史の寄せ集めという指摘を受ける原因ともなっている。民族をアクターとして一国の歴史や社会の動向が理解され、ナショナリズムが猛威を振るう原因ともなっている。

ただ、近代的なネイション(民族)が成立するには、「エトニ」がその核となったという有力視される学説がある。これはあたかも近代以降における民族意識の原形が生来的に存在していたという理解にほかならない。同時代史料を使って「実証的」に証明されているならまだしも、これらの立論は、近代的民族観の枠組みの中で進められている。社会的作用により、時と場合によって、民族とは無関係に人は行動し変化することを無視し、同一の文化・言語によっておのずと類をなし、そこには共通の性質がみとめられるという近代的人間観に基づくものといわねばならない。

こうした学説が根強く存在するのは、後に民族名称となる人の識別用語が、前近代にも使用されている場合もあり、前近代における「民族」あるいは「人種」名とされている語が如何なる意味を有し、どのように機能していたか、また前近代における人の識別と社会の構造との関係が明らかにされていないからであろう。この点が、「実証的」に解明されれば、「エトニ」も近代になって生み出された見解であり、これによって前近代を照射していることが証明されるに違いない。

2. 研究の目的

ネイションやエスニシティの成立過程に関する研究に、前近代社会における「人種」の意味についての具体的実証的な事例を提供することを目的とする。これまで前近代における「人種」概念についての見解は、その多くが近代以降に書かれた文献、つまり近代的ネイション意識(民族)が成立した後に叙述された歴史書や文書等に依存しており、いわば民族概念からの類推に基づいて組み立てられていた。そのため、同時代的感覚での「人種」意識解明にはつなげていなかった。

そこで、当時の社会生活の中で残された史料の分析により、前近代社会において「人種」がいかなる意味を有していたかにせまりたい。前近代における「人種」名が、社会のな

かで如何なる機能を果たしていたかを、当時の社会構造や王国政府の政策との関連で考察し、近代以降における民族とこの「人種」が如何なる関係にあるのかを検討する。そして、最終的には民族の形成過程を、近代社会における政治制度や社会政策の展開過程との関連で実証的に解明する。

ここで明らかにされるのは、さしあたりエーヤーワディー流域地方に成立したコンバウン王国下における「人種」に関する呼称の社会的意味であるが、このことによって、近代における人種名はこれとは無関係に成立していること、つまり、たとえ同じ「人種」呼称であっても、近代と前近代ではその内容が異なり、現在の民族概念に前近代の「人種」は接続しないことが証明する。

こうして民族をアクターとし、その呼称を超歴史的に用いる歴史叙述の方法を改め、ナショナル・ヒストリーを超えうる、グローバル化に対応した歴史の方法を確立せんとする。あわせて世界中で深刻化している民族紛争に、その泥沼化から抜け出すためのパラダイムを提供したい。

3. 研究の方法

日本語の民族を近代的、「人種」は前近代的な人の識別にかかわる用語として扱いつつ、19世紀はじめエーヤーワディー流域地方で語られ、図像としても表現されていた「101の人種 *Lu-myo Taya-taba*」という住民識別方法を手掛かりに、「人種」の意味を検討する。

101なる数字は仏典に由来し、もともと厳密な数を示したものではなく、「たくさんのもしくは「すべての」のという程度の意味であったが、コンバウン王国時代は、個々の名前をあげ、その全貌が示されていた。ただ個々の名称は論者(年代記の作者や僧侶、高官・知識人)によって一致せず、かつその分類法も異なっていた。まずはこの用例をできるだけ集め、101種の構成内容やその下位分類法の相違、これが使用・説明される文脈などを、論者ごとに比較検討する。そして、「人種 *Lu-myo*」という言葉による人の識別が、どのような目的で、いかなる基準を用いてなされて、そこにどのような世界が出現していたかを明らかにしていく。

またこの「101の人種」は、18世紀に建設された窟院の壁画にもその姿が認められる。それぞれ名前を付し、跪拝する姿が極彩色の顔料で描き分けられている。このサンプルを、各地に残る窟院壁画の調査によりできるだけ収集し、「101の人種」が登場する場面やその風体など、窟院間での相違を検討することにより、人を101種に識別することや、異「人種」として住民を識別することの、社会的意味を探る。

そして文書の分析から導かれる「101の人種」概念や、壁画に示された個々の肖像を比較することにより、「人種」識別と、王国時代の統治形態や社会システムとの関連を検

討する。近代以降の民族が、国民国家概念の成立と軌を一にしていたことに鑑み、「人種」がどのような社会システムと相即的關係にあったのか、王国時代の住民統治形態の具体例に即して解明し、あわせて植民地期以降、この「人種」が民族に転化していく過程を、近代的統治の確立との関連で明らかにする。

4. 研究成果

(1) 18世紀中期から19世紀にかけて、エーヤーワディー川流域地方に存在したコンバウン王国において、「101の人種」に関する記述は、パーリ語伝典や、古典歌謡、高僧や高級役人・知識人の記録などに認められる。その前の時代の王国、および西部に位置したヤカイン王国のものも含めると、ビルマ語圏において、個々の名称やその下位分類法には少なくとも12種類存在することが確認できた。

「101の人種」は、いずれの文献にも、大きくビルマ系、タライン(モン)系、シャン系、カラー(西方の人、*Kala*)系に分類されている。ビルマ系は、いずれも7種存在するとされるが、論者間でどれ一つとして一致するものはない。みずからの「人種」下位区分がビルマ語圏においてさえ、そして19世紀初期の政府部内においてさえも、共通でなかった。だれを何「人種」とするか、どんな「人種」が存在するか一致していない。そのメルクマールさえも互いに異なるが、概してタウントゥーが山の人という意味であるように、ダーウェーやヤカインのように居住地(もしくは地名となったもの)を用いたものも多かった。

現代の感覚からすれば「身内」の分類からしてこうであるので、南部に住むタライン系については推して知るべし、である。タラインはビルマの史書に頻出し、これを3種に分類するものと4種の場合があり、それら個々の名前も一致しない。いずれも基本的には、地理的区分(出身地)による命名法が用いられている。

また27種もしくは30種に分類されるシャン系の場合は、その中にカレンやカチン、チン、タヨウ(中国)など、現在では別民族と理解されているものを含んでいるところを見ると、このシャンも民族名ではなく地域名であったといえよう。

そしてカラー系は60種と64種の二通りの下位分類法があるが、そのほとんどがジャータカなど仏教書にみられる人種名が列挙されている。一部はビルマ語風書き改められたものであるが、パーリ語名がそのまま用いられた。例えば *Gotama* は仏陀の氏族名、*Kosiya* は農民、*Vasudeva* は強健な人、*Baladeva* は愚人、*Corayana* は耳の大きい人、*Aggivesayana* は拝火人、*Vagacchayana* は放浪者の意で、ほとんどがいわゆるジャーティ名である。この部分は、カラーということ、で「101の人種」をそろえるために動員された

という感が強い。

「101の人種」の内容は、このように論者・テキストごとに異なり、もっとも身近であるビルマ系についても、下位分類名は同じでなく、当時「人種」名について統一した見解は存在していなかったことが判明した。しかも時代をさらにさかのぼらせると、また違った分類法と「人種」名があらわれる。王国体制下において、「人種」名は生活様式や言語というより、主として地域や伝典の情報に基づいたものであり、かつ19世紀初期の段階にあっても統一したものはなかった。当然のことながら時代によっても異なり、同じビルマ語圏でありながら、ヤカインではビルマの呼称さえ異なっていたのである。

「人種」名について、共通理解が存在していなかったことは、その名称自体が社会の中で大きな意味を持っていなかったことのアラわれである。誰がどの「人種」に属するかは、たいした問題ではなかったということであろう。また人の区分に用いられた「*Lu-myo*」(「人種」という言葉は、インドの身分制にかかわる用語ジャーティやゴッタの概念を取り込んでいた。つまり、「人種」の区分は、地域や居住地の名前に加え、階層、生業、などをそのメルクマールとしたものとなっていたのである。いずれも「生来の」とか現代でいう「文化」という考え方に基づくものではなかった。

当時の国王は、自らの正統性を伝教的世界秩序の中で説明しようとしていた。そうした世界の頂点に立っていることを示すため、世界を認識する手段の一つであった伝典にある「101の王の王」、「101の人種」というカテゴリーを必要としたのである。そのためには、101の内容を具体的に明示さなければならぬ。これによって自らの支配世界が伝教世界であり、その頂点に立っているとの認識を内外に示すことができたのである。「101の人種」という概念は、住民を区分するためのものというより、王権を正統化する装置として意味があったといえよう。

たしかに、出自や出身地、職種などによってグループ化し、いちおうは名称も貼り付けてはいたが、個々がどのような人物であったのかはあまり問題ではなかった。政権要路の論者によっても呼称が異なるのは、そのラベルを、グループ化した人びとの性格や行動様式に対応させようとする政治的意図が存在していなかったことを示している。従って、一人の人がいろいろな「人種」名で呼ばれたに違いない。単に「多数の」という意味で使われているにすぎない101という数字を、あたかも実態のように扱っているところにも、これが現実の反映でなかったことをよく示している。つまり、世界はいろいろな「人種」によって成り立っているという認識こそが必要だったのである。

国民国家体制下においては、一人ひとりの宗教、考え方、嗜好、生き方、そして歴史(記

憶)に関心が向けられ、その異同が問題にされる。そしてこれらを限りなく一致させるべく、さまざまな施策がこうじられ、生来的という発想が生み出された。しかし、前近代にあっては同一政権の支配下にあっても、場所によって統治は異なり、同じ場所にしても、時代によって統治が変わり、これによって人の思想や行動様式は変化していく。ここでは、余計な行政コストを必要とする人の考え方や行動様式の均一化策は二の次のことで、財や労働力における余剰の収奪こそが第一の目的であった。従ってこれが達成される限り、個人の思考や生活様式には無関心で、ここでいう「人種」は人間の性行に着目した現代の民族概念とはまったく異なる。

(2)18世紀から19世紀にかけて、ミャンマー中央平原地域、とりわけチンドウィン川下流域やエーヤーワディー川中流域沿いの町や村に建設された窟院や経蔵、戒壇には、内部に壁画をもつものが少なくない。モチーフの大半は仏伝やジャータカであるが、その中には「101の人種」図や「外国人」が描かれているものもある。衣装や顔つきからして、ヨーロッパ系やアラブ系ムスリムなど、さらには「スペイン人」「ポルトガル人」「オランダ人」「中国人」などとして識別されてきた。

そもそもエーヤーワディー中流域世界と周辺との交流は、交易や戦役などを通して当然存在していたので、明らかに言語や風俗習慣の異なる人たちが混住していたことは、11世紀パガン時代からの各種史料が示すところである。また、資源の最たるものは人間で、周辺諸国との抗争や、これに対する侵略戦争によって獲得・連行してきた捕虜に、土地をあたえて定着させ、騎馬兵や銃兵や砲兵、象兵などのアフムダーン(王務員)として、王室の直接支配下に組みこむこともおこなっていた。加えて16世紀以降は、「東西交易」活発化の波に乗って、さらには西北ヨーロッパで設立された、いくつかの東インド会社や修道会の活動により、それまでとは明らかに異なるインド以「西からの人」(Kalaカラー)の流入がいきよに進む。

まず、今回の調査によりエーヤーワディー中流域地方の5ヶ所で発見できた、窟院にある「101の人種」図を比較すると、各「人種」の姿は、人(絵師)によっておおきく異なる。また別の場面で描かれたさまざまな「外国人」も、その風体はまったくの想像といってよいものであった。絵師は日ごろ目にする、彼らの恰好を取り入れていたのであろうが、帽子や服装、顔つきなどの組み合わせに統一したパターンがなく、たんなる「異人」が表現されているにすぎない。

「101の人種」図は、多様な衆生が釈尊に皈依する様子を表現したものであるが、先述のごとく、この概念は王権の正統化にも使用されていた。そのためこれが描かれるということは、俗世の権力にとっても意味あることであったといえる。しかし、基本的に、これは

仏教世界での話に登場するものであり、その文脈で「101の人種」図は描かれていたと考えなければならない。そうであればこそ、我々は、この図から、当時の政治世界のあり様というより、一般人の「人種」観を導き出すことができると考えられる。庶民はこうした窟院に参拝するたびに、「101の人種」図を目にし、これによって世界を認識していたに違いない。

そこで他の仏伝等に登場する「異人」の図像をみると、同時期に、同一プロットのほぼ同じ場面が描かれた壁画であっても、その人物描写は一致しない。ある場合は「西洋人」らしき者が描かれたり、ある場合はアラブ人ムスリムのような風体であったり、単におどろおどろしい風体であったりする。「ポルトガル人」や「スペイン人」という民族観があれば、すくなくともそれと判別できるような姿が、どの壁画にも描かれたであろう。そうと判断した特徴が混在することなどありえない。「人種」像が一致しないというのは、「異人」というものについて、我われとは違った理解がなされていたことを示している。今でいう「ポルトガル人」やムスリムなど、その現実を目にしているにもかかわらず、現代人と共通するようなイメージを形成していたと考えすることはできない。

たしかに当時、日常的にズボンをはいたり、ターバンを巻いたりし、言葉も違う集団が存在するという認識はあったであろう。しかしそこに相互に異なる性質をみだし、これによってその集団をカテゴライズし、たとえば「スペイン人」とか「ポルトガル人」として、その属性によって区別するというようなことがおこなわれていたとは考えにくい。もちろん西ヨーロッパにおいても、当時、そうした観念はいまだ成立していなかった。壁画の絵を見る限りにおいても、そのあたりの相違は、明確でないし、「101の人種」名の中にそうした名前は見当たらない。王国時代には、インドや西洋からの人に対しては、カラーという、漠然とした言葉しかなかったこともこれを裏付ける。

つまり、何々「人種」はその性格に基づき、こうした言語を話し、こういう恰好をするという理解の仕方がなかった、つまり、成立していなかったということになる。まだ接触が浅く、そうした認識が成立する情報を持ち合わせていなかったというのではない。そもそもそうした識別方法に関心がなかったとしか思えない。もしそうであるなら、少なくとも身近な人種、たとえば「モン」とか「カレン」とかについては、現代の我われからみても、おのずとそう理解できるような格好に描かれていなければならない。

ところが5件の「101の人種」図には、それぞれまったく異なる恰好が描かれていた。近現代でいうエスニックな要素に着目した水平な私たちでの人種観、すなわち民族概念が存在していたのであれば、このようなこと

は起こりえない。先に示した文献による分析に加え、壁画の人物像からも、現在の民族につながる人種観は存在していなかったということが確認できよう。

例えばカレン人なる言葉によって、その人類学的内容が記述され、他との関係のなかで典型的カレン像つまり「民族衣装」が創り上げられるのは、植民地期以降のことである。壁画の人物を、「ポルトガル人」や「中国人」と判断するのは、近代以降に出来上がった民族概念が、前近代を判断する枠組みを作り上げていることを暴露しているといわねばならない。これは民族という概念は近代において成立したものであるにもかかわらず、それを生み出す胚子は、前近代に存在したという考え方にも通じる。

(3)「人種」という言葉による人の区別・差別の様相について、特に地方村落コミュニティにおけるアフムダーンとりわけ、砲兵・銃兵隊として起用されたカラビョー（ムスリム）人（族）を取り上げ、実際の王国行政施策のなかでこれを検討した。この「人種」は、18世紀なかごろ、ヤカイン地方から連行されてきたという伝承をもっている。

19世紀中期にかけて、カラビョーは王国軍の主要な一翼を担い、王宮の警備も担当し、中には王室や後宮の高官に取り立てられた者もいた。イスラームを信仰する彼らのため、ミンドン王時代（1853-78）の王都マンガレーには64ヶ所にモスクが存在したことが知られている。現在も残るパランポー・モスクは1864年に、パランポー砲兵隊に下付された土地に建設されたものであり、スーレー・モスクは、1856年チャウセーにあったスーレーゴン村出身の砲兵カラビョー・ムスリムに下付された土地に立つ。18世紀末の旧都アマラプーラにも、モスクが少なくとも2か所建てられ、高官のための墓地も提供されていた。また地方の旧都市ミエドゥー・ミョウの周辺にはカラビョーの村落やモスクが存在し、かつこの城郭内西側にも18世紀にはモスクが4ヶ所に建設されていた。

騎馬隊を構成したマニプール出身の、ヒンドゥー教徒であるカテーなどと同じく、とりたててムスリムを擁護していたわけではない。一般の仏教徒と同様、「異教徒」つまり仏教という「外道」の信仰や儀礼に対する配慮がなされていた、もしくは無関心であったということである。さらに、勅令や民間で作成された借金証文等を点検しても、仏教徒の慣習が押し付けられたり、不当に扱われたりしていたという形成はない。ただ決められた職責を果たす限り、信仰や生活様式に何ら干渉が加えられることはなかった。従って、王国時代の「人種」は、単に出身地や信仰形態の違いを示すためのくくりにすぎず、一つのコミュニティとして色分けし、社会的な「排除」や「包摂」の対象とするための概念ではなかったということが出来る。

ところが、このカラビョーの子孫たる、植

民地期以降のビルマ・ムスリムは、ひとつのエスニック・コミュニティとして自らを認識し、ナショナリズム運動やエスニック闘争の一翼を担っていく。その過程は、20世紀前半のイギリス領インド帝国ビルマ州における統治法の改正、具体的には立法参事会選挙制度の改正に対して、このビルマ・ムスリムが各種準備委員会に出した決議文や覚書を分析することによって明らかになるが、このことは「人種」が如何にしてエスニシティを抱くにいたるか、の経緯を如実に示している。

ビルマ・ムスリムとは、自らをムスリムであるがビルマ人とし「インド人ムスリム」とは異なると主張する人びとのことである。地域によって濃淡はあるものの、1930年代、南はタニンダーリーからビルマ中央部にかけて、ビルマ・ムスリムのコミュニティ組織が広範に存在していた。当初政府によってザバディーという名で認識されるが、ビルマにおいて反インド人感情が高まるなか、彼らはこの呼称に危機意識を持ち、1910年代に我われビルマ族という主張をかかげつつ、自らをビルマ・ムスリムと規定するようになる。

そして1920年代から30年代前半にかけては、ビルマ族仏教徒からの排除と、自らの非インド人意識によって、政府による政治的庇護を求める運動を活発化していく。というのも、1920年代から立法参事会の議員が選挙によって選ばれ、被植民地の住民が大臣その他行政の要職に就くことが可能となっていたからである。しかもその選挙区が、エスニック・コミュニティや利害団体ごとに設定されるようになった。その後、再度の立法参事会の改革に際し、どのコミュニティや団体にどれだけの選出議員数を配分するかは、一応住民の意見を聞きつつ進められたので、かれらは自らの範囲と利害を明確にし、議席確保へ向けて政府へのはたらきかけを展開する。

立法参事会は、1923年の統治法であれ、1937年のそれであれ、その権限は大きく制限されたものであったが、当時としては、州政や国政の最重要な議決機関であった。ここに自らの代表を送り込むことができるか否かは、いわば当該コミュニティの明暗を左右するものとして受け取られたのである。

結局1937年段階では、インド人、カレン人、ヨーロッパ人、イギリス系ビルマ人に対するコミュニティ別の選挙区と、ビルマ商業会議所などのため6つの利害団体別の選挙区が設定されることになった。インド本土と異なり、ムスリムを優遇するという措置は取られなかったが、政府にとって重要なエスニック・コミュニティに配慮した政策がとられたのである。

この過程でビルマ・ムスリムは、自らは宗教が異なるだけで、ビルマ族であるとしつつも、その一方で、これとは区別して独自の代表を、立法参事会へ経常的に送り込むことができるように画策していたわけで、「感覚からいっても政治的見解においても真のビル

マ族」とは考えていなかった。全国的にみて一枚岩の組織が成立していたとはいいがたかったが、宗教そして思想・信条・習慣・伝統などに着目し、インド人ムスリムとは明確に異なるとした同胞意識を持つ、ひとつの政治集団としてのエスニシティが、まぎれもなく形成されたとみてよい。

植民地下に限らないことであるが、近代国家による集権化は、ひとつの言語や規範によって推進されるので、そうしたなかで形成される政治勢力は、言語や習慣つまり「文化」に強いこだわりを示し、これを運動の原動力とせざるをえない。政府や社会に対する不満は、「文化」の違いに着目し、これによって自らの境界を設定した集団を作りあげていく。こうして一つの支配空間つまり政治空間に、民族あるいは人種による違いに着目した多数派と少数派が生み出される。

何をもって一つの民族・人種と定義するかにもよるが、英領ビルマでは宗教が最も重要なファクターと考えられていた。これはイギリスがインドやビルマを支配する際に、住民の反発をおそれるがゆえに宗教に着目し、とりわけ民事についてはこれを当該の宗教法によって処理しようとしたことに因ろう。エスニシティの境界線は、中央集権化によって生み出される。もちろん、この線が際立ち、相互の対立に発展するのは、統治者や政府による施策の結果であることは間違いない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

伊東利勝「エスニシティの生成 ビルマ・ムスリムを例として」『愛大史学』第27号, 2018, 19 - 66.

<http://id.nii.ac.jp/1082/00008889/>

伊東利勝「前近代社会の「民族」 エーヤーワディー流域コンバウン王国のカレン」『歴史の生成 叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』(小泉順子編) 京都大学出版会, 2018, 263 - 326.

伊東利勝「「日本人」の「ビルマ進出」について 「からゆき」先導型進出パラダイム批判」『ミャンマー 国家と民族』古今書院, 2016, 127 - 154.

伊東利勝「オウタマ僧正と永井行慈上人」『仏教をめぐる日本と東南アジア』(大澤広嗣編) 勉誠出版, 2016, 127 - 142.

伊東利勝「18世紀エーヤーワディー中流域世界における異人のイメージ」『愛大史学』第25号, 2016, 29 - 76.

<http://id.nii.ac.jp/1082/00006022/>

伊東利勝「前近代ビルマ語世界における「百一の人種」について」『文學論叢』(愛

知大学文学会) 第151輯, 2015, 1 33.
<http://id.nii.ac.jp/1082/00004481/>

〔図書〕(計2件)

伊東利勝編著『功德と喜捨と贖罪 宗教の政治経済学』愛知大学人文社会学研究所, 2018年, 1 - 11, 19 - 87.

伊東利勝編著『南伝上座仏教と現代』愛知大学人文社会学研究所, 2017年, 1 - 3, 9 - 26.

<http://id.nii.ac.jp/1082/00007720>

<http://id.nii.ac.jp/1082/00007722>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東 利勝 (ITO, Toshikatsu)

愛知大学・文学部・教授

研究者番号: 60148228